

◆ 小説 1

単元の振り返りシート

____年____組 名前____

学習目標

- ＊ 作品の構成、場面や状況における登場人物の心情を適切に読み取る
- ＊ 語りの仕組みを理解し、視点を変えて物語を書き換える

①学習した教材

--

②学習目標をふまえて、単元での学習を通してわかったこと、できるようになったことを書き出そう。

--

③単元で学習したことを、これからどのような場で生かせるか考え、自分の言葉でまとめよう。

--

🏠 目次 <小諸なる古城のほとり（島崎藤村）> ▶ 椰子の実（島崎藤村）

椰子の実

島崎藤村

名も知らぬ遠き島より
流れ寄る椰子の実一つ

故郷の岸を離れて
汝はそも波に幾月

旧の樹は生ひや茂れる
枝はなほ影をやなせる

われもまた海を枕

孤身の浮寝の床ぞ

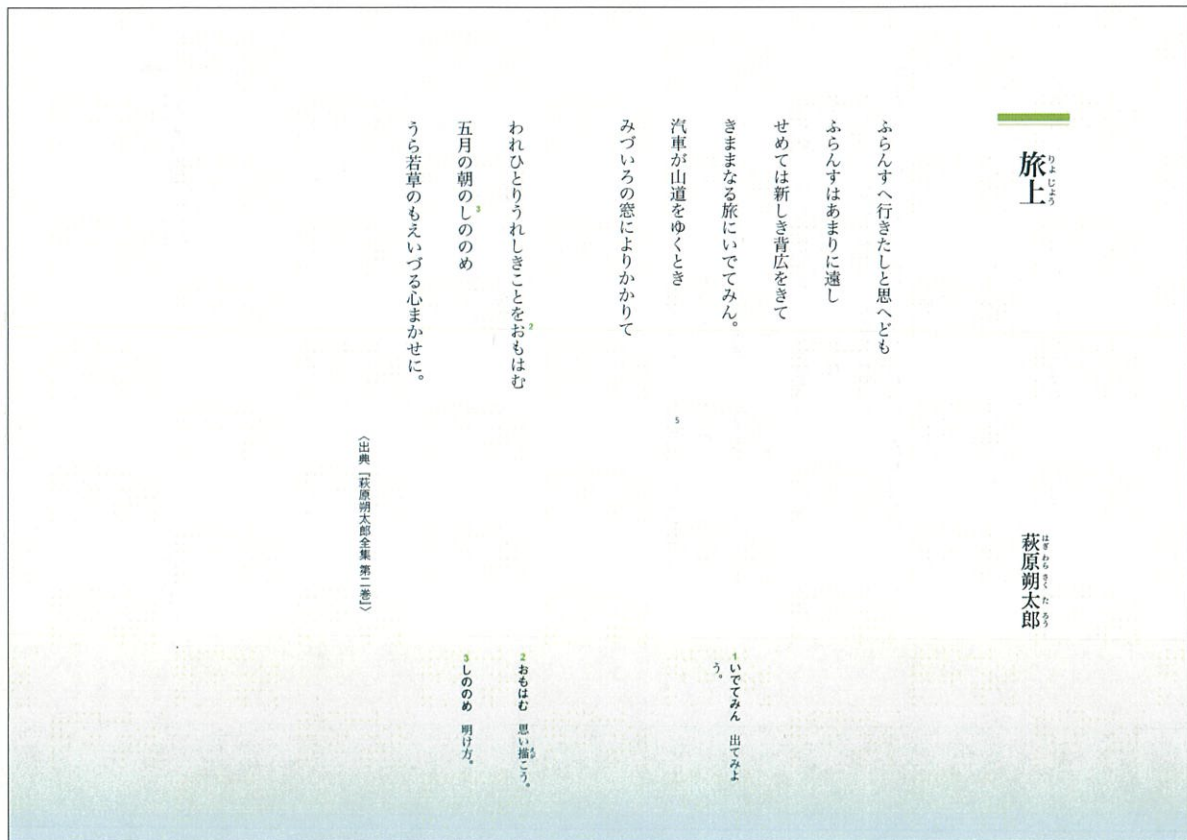
実をとりて胸にあつれば
新なり流離の憂

海の日のはつむを見れば
激り落つ異郷の涙

思ひやる八重の瀬々
いづれの日にか国に帰らん

〈山奥「日本の詩歌」島崎藤村（中央公論社、一九七四年）〉

【参考】島崎藤村（しづまきとうぶん）
（一八七二明治五年—一九四三昭和一八年）
詩人、作家、小説家の生家。
【参考】「浮城」は「高城」を誤記したと



（上記と同じ「旅上」を入れる）

死なない蛸

萩原朔太郎

或る水族館の水槽で、ひさしい間、飢えた蛸が餌はれてゐた。地下の薄暗い岩の影で、青ざめた玻璃天井の光線が、いつも悲しげに漂つてゐた。

だれも人人は、その薄暗い水槽を忘れてゐた。もう久しい以前に、蛸は死んだと思はれてゐた。そして腐つた海水だけが、埃っぽい日さしの中で、いつも硝子窓の槽にたまつてゐた。

けれども動物は死ななかつた。蛸は岩影にかくれて居たのだ。そして彼が目を見つけた時、不幸な、忘れられた槽の中で、幾日も幾日も、おそろしい飢餓を忍ばねばならな

① 玻璃 ガラス

かつた。どこにも餌食がなく、食物が全く尽きてしまつた時、彼は自分の足をもいで食つた。まづその一本を。それから次の一本を。それから、最後に、それがすっかりおしまひになつた時、今度は胴を裏がへして、内臓の一部を食ひはじめた。少しづつ他の一部から一部へと、順順に。

かくして蛸は、彼の身体全体を食ひつくしてしまつた。外皮から、脳髓から、胃袋から。どこもかしこも、すべて残る限なく、完全に。

或る朝、ふと番人がそこに来た時、水槽の中は空っぽになつてゐた。曇つた埃っぽい硝子の中で、藍色の透き通つた潮水と、なよなよした海藻とが動いてゐた。そしてこの岩の隅隅にも、もはや生物の姿は見えなかつた。蛸は実際に、すっかり消滅してしまつたのである。

けれども蛸は死ななかつた。彼が消えてしまつた後ですらも、尚ほ且つ永遠にそこに生きてゐた。古ぼけた、空っぽの、忘れられた水族館の槽の中で、永遠に——おそろくは幾世紀の間を通じて——或る物すごい欠乏と不満をもつた、人の目に見えない動物が生きて居た。

——『宿命』

目次 <サーカス (中原中也)> ▶ 汚れつちまつた悲しみに…… (中原中也)

汚れつちまつた悲しみに……

中原中也

汚れつちまつた悲しみに
今日も小雪の降りかかる
汚れつちまつた悲しみに
今日も風さへ吹きすぎる
汚れつちまつた悲しみは
たとへば狐の草薙
汚れつちまつた悲しみは
小雪のかかつてちこまる

汚れつちまつた悲しみは
なにのぞむなくねがなく
汚れつちまつた悲しみは
倦怠のうちに死を夢む

汚れつちまつた悲しみに
いたいたしくも怖気づき
汚れつちまつた悲しみに
なすところもなく日は暮れる……

〔出典〕『中原中也全集』(角川書店 一九六七年)

〔著者〕中原中也(なかはら ちゅうや)
一九〇七年(明治四〇年)―一九二七年(昭和二年)
詩人、山口県生まれ
〔著書〕『山羊の歌』、『在りし日の歌』など

月夜の浜辺

中原中也

月夜の晩に、ボタンが一つ
波打際^{なみぎはし}に、落ちてゐた。

それを拾^{ひろ}つて、役立^{やくだ}てようと
僕は思^{おも}つたわけでもないが
なぜだかそれを捨^すてるに忍^{しの}びず
僕はそれを、袂^{たもと}に入れた。

月夜の晩に、ボタンが一つ
波打際^{なみぎはし}に、落ちてゐた。

それを拾^{ひろ}つて、役立^{やくだ}てようと
僕は思^{おも}つたわけでもないが
月に向^{むか}つてそれは揺^ゆれず
浪^{なみ}に向^{むか}つてそれは揺^ゆれず
僕はそれを、袂^{たもと}に入れた。

月夜の晩に、拾^{ひろ}つたボタンは
指先^{さき}に沁^ひみ、心^{こころ}に沁^ひみた。

月夜の晩に、拾^{ひろ}つたボタンは
どうしてそれが、捨てられようか？

『山と海』日本の詩歌23 中原中也 伊東静庵 八木重吉 (中央公論社、一九七四年)

【参考】 中原中也 (なかはら ちゅうや)
一九〇七年(明治四〇年)―一九三七 昭和一二 年
神戸、山口県生まれ。
『山と海』『月夜の晩』など

樹下の二人

高村光太郎

みちのくの安達が原の二本松の根かたに人立てる見ゆ――

あれが阿多羅山、
あの光るのが阿武隈川。

かうやつて言葉すくなく坐つてみると、
うつとりねむるやうな頭の中に、

ただ遠い世の松風ばかりが薄みどりに吹き渡ります。

この大きな冬のはじめの野山の中に、

あなたと二人静かに燃えて手を組んであるようこびを、

下を見てあるあの白い雲にかくすのは止しませう。

あなたは不思議な仙丹を魂の壺にくゆらせて、
ああ、何といふ幽妙な愛の海でこゝ人を誘ふことか、

ふたり一緒に歩いた十年の季節の展望は、
ただあなたの中に女人の無限を見せるばかり。

無限の境に燃えるものこそ、
こんなにも情意に悩む私を清めてくれ、

こんなにも苦渋を身に負ふ私にかな若さの泉を注いでくれる、
むしろ魔もののやうに捉へがたい

妙に変幻するものですね。

あれが阿多羅山、
あの光るのが阿武隈川。

ここはあなたの生れたふるさと、

① みちのく 現在の青森、岩手、宮城、福島各県にまたがる地域。
② 安達が原 福島県安達郡の安達太良山東麓に広がる原野。
③ 阿多羅山 安達太良山のこと。福島県北部にある火山。標高約一七〇メートル。
④ 阿武隈川 福島県中部を流れて宮城県に入り、太平洋に注ぐ川。

⑤ 仙丹 服用すると不老不死となり、仙人になるといふ薬。

🏠 目次 <単元の振り返り> ▶単元の振り返りシート

詩	
単元の振り返りシート	
____年 ____組 名前____	
学習目標	- 詩の特徴的な表現の技法とその効果について理解する - さまざまな詩の形式にふれ、描かれた情景や心情を理解する
①学習した教材	
②学習目標をふまえて、単元での学習を通してわかったこと、できるようになったことを書き出そう。	
③単元で学習したことを、これからどのような場で生かせるか考え、自分の言葉でまとめよう。	

目次 < 夢十夜 (夏目漱石) > ▶ 吾輩は猫である (夏目漱石)

吾輩は猫である

夏目漱石

吾輩は猫である。名前はまだない。
どこで生まれたかどうかわからない。なんでも薄暗いじめじめした所で「ニャーニャー」鳴いて
いたことだけは記憶している。吾輩はここ初めて人間というのを見た。しかもあとで聞くと
それは書生という人間中では一番醜態な種族であったそうだ。この書生というのはときどき
我々を捕まえて煮て食うという恐ろしい。しかしその当時はなんともいえない。それから別段
恐ろしいとは思わなかった。ただ彼のてのひらにのせられてスーと持ち上げられたときなんか
フワフワした感じがありがたかった。このひらの上で少し落ちついて書生の顔を見たのがい
わゆる人間というものの見始めであらう。「このとき妙なものだと思った感じが今でも残ってい
る。だいたい毛をもった裝飾されたべきはずの顔がつるつるしてまるでやかんだ。その後顔にも
だいたい毛が。たがこんな顔には一度もくわしことがない。のみならず顔のまん中が余りに突起
している。そうしてその穴の中からときどきぶふうと煙を吐く。どうもむせぼくて実に窮
た。これが人間のむねばこというものであることはようやくこの頃知った。
この書生のてのひらの内ではよくいむ持ちに座っておったが、しばらくすると非常に速
力で運転し始めた。書生が動くのか自分だけが動くのかわからないがむやみに目が回る。胸が悪

くなる。どうもい助かないと思っていると、どさりと音がして目から火が出た。それまでは記
憶しているがあととはなんのことやらいくら考え出そうとしてもわからない。
ふと気がついてみると書生はいない。たぶんおわった兄弟が「一匹も見えぬ」肝心の母親さえ姿
を隠してしまっただ。そのうえ今までの所とは違っただ。目を開いていられたくら
いだ。はてなんでも様子がおかしいと、そのそはい出してみると非常に痛い。吾輩はわらの上
から急に前庭の中へ捨てられたのである。
ようやくの思いで前庭をはい出すと向こうに大きな池がある。吾輩は池のほとり座ってうたた
らまろうと夢見てみた。べつにこれという分別も出ない。しばらくして鳴いたら書生がまた遠
いに来てくれるかと考えた。ニャー、ニャーと試みにやってみたが誰も来ない。そのうち池
の上をさらさらと風が流れて日が暮れかかる。腹が非常にへって来た。鳴きたくても声が出ない。
しかたがない。なんでもいから食い物のある所まで歩こうと決心してそろりそろりと池を左
に回り始めた。どうも非常に苦しい。そこを我儘して無理やりにはやくとようやくのことで
なんとなく人間界へ出た。「こへ入った、どうにかな」と思いついて竹垣の崩れた穴からと
ある邸内に潜り込んだ。縁は不思議なもので、もしこの竹垣が破れていなかったら、吾輩はつ
いに路傍に餓死したかもしれんのである。「樹の陰にはよくいたものだ。この垣根の穴は今日
に至るまで吾輩が隣の三毛を訪問するときの通路になっていた。さて屋敷へは忍び込んだもの
のこれから先どうしていいかわからない。そのうちに暗くなる。腹はへる。寒さは寒し。雨が
降ってくる。この雨ももう一刻の猶予がでなくなつた。しかたがないからとにかく明るくて
暖かそうなる方へ方へ歩いてゆく。今から考えるとそのときは既に家の内に入っておったのだ。
こゝで吾輩はかの書生以外の人間を再び見るべき機会に遭遇したのである。第一に会ったのがお

①「書生」すし、また、他の
をさす。いながら
四角い人

②「一匹の見えぬ」たまたま同じ
本館に居るのも書生からの
同様にいふことである。
③「おきん」おきん。屋
わけて家事や洗濯をする女
性の従用人のうち、上に白
色着を着る者

◆ 小説 2

単元の振り返りシート

____年 ____組 名前____

学習目標

- ＊ 物語と現実との関係に注目して、文章の意味を理解する
- ＊ 作品の世界観を支える構成や表現の特色について理解する

①学習した教材

--

②学習目標をふまえて、単元での学習を通してわかったこと、できるようになったことを書き出そう。

--

③単元で学習したことを、これからどのような場で生かせるか考え、自分の言葉でまとめよう。

--

短歌

いちはずの花咲きいでし我が目には今年ばかりの春行かんとす

正岡子規

牛飼が歌よむ時に世の中の新しき歌大いに起る

伊藤左千夫

春ここに生るる朝の日をうけて山河草木みな光あり

佐佐木信綱

みづうみの氷は解けてなほ寒し三日月の影波にうつろふ

島木赤彦

青玉のしだれ花火のちりかかり消ゆる路上を君よいそがむ

北原白秋

清水へ祇園をよぎる桜月夜こよひ逢ふ人みなうつくしき

与謝野晶子

俳句

柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺

春風や關志いだきて丘に立つ

うしろすがたのしぐれてゆくか

咳をしても一人

赤い椿白い椿と落ちにけり

ゆさゆさと大枝ゆるる桜かな

正岡子規

高浜虚子

種田山頭火

尾崎放哉

河東碧梧桐

村上鬼城

🏠 目次 < 単元の振り返り > ▶ 単元の振り返りシート

◆ 短歌・俳句

単元の振り返りシート

____年 ____組 名前____

学習目標

- ・ 短歌・俳句の形式と表現の技法について理解する
- ・ 作品に詠まれた情景や心情について理解する
- ・ 自分の思いが伝わるよう表現の仕方を工夫して、短歌・俳句を作る

① 学習した教材

② 学習目標をふまえて、単元での学習を通してわかったこと、できるようになったことを書き出そう。

③ 単元で学習したことを、これからどのような場で生かせるか考え、自分の言葉でまとめよう。

森鷗外

- 1 「文政三」一七八八年
- 2 「文政四」一七八九年
- 3 「文政五」一七八〇年
- 4 「文政六」一七八一年
- 5 「文政七」一七八二年
- 6 「文政八」一七八三年
- 7 「文政九」一七八四年
- 8 「文政十」一七八五年
- 9 「文政十一」一七八六年
- 10 「文政十二」一七八七年
- 11 「文政十三」一七八八年
- 12 「文政十四」一七八九年
- 13 「文政十五」一七八〇年
- 14 「文政十六」一七八一年
- 15 「文政十七」一七八二年
- 16 「文政十八」一七八三年
- 17 「文政十九」一七八四年
- 18 「文政二十」一七八五年
- 19 「文政二十一」一七八六年
- 20 「文政二十二」一七八七年
- 21 「文政二十三」一七八八年
- 22 「文政二十四」一七八九年
- 23 「文政二十五」一七八〇年
- 24 「文政二十六」一七八一年
- 25 「文政二十七」一七八二年
- 26 「文政二十八」一七八三年
- 27 「文政二十九」一七八四年
- 28 「文政三十」一七八五年
- 29 「文政三十一」一七八六年
- 30 「文政三十二」一七八七年
- 31 「文政三十三」一七八八年
- 32 「文政三十四」一七八九年
- 33 「文政三十五」一七八〇年
- 34 「文政三十六」一七八一年
- 35 「文政三十七」一七八二年
- 36 「文政三十八」一七八三年
- 37 「文政三十九」一七八四年
- 38 「文政四十」一七八五年
- 39 「文政四十一」一七八六年
- 40 「文政四十二」一七八七年
- 41 「文政四十三」一七八八年
- 42 「文政四十四」一七八九年
- 43 「文政四十五」一七八〇年
- 44 「文政四十六」一七八一年
- 45 「文政四十七」一七八二年
- 46 「文政四十八」一七八三年
- 47 「文政四十九」一七八四年
- 48 「文政五十」一七八五年
- 49 「文政五十一」一七八六年
- 50 「文政五十二」一七八七年
- 51 「文政五十三」一七八八年
- 52 「文政五十四」一七八九年
- 53 「文政五十五」一七八〇年
- 54 「文政五十六」一七八一年
- 55 「文政五十七」一七八二年
- 56 「文政五十八」一七八三年
- 57 「文政五十九」一七八四年
- 58 「文政六十」一七八五年
- 59 「文政六十一」一七八六年
- 60 「文政六十二」一七八七年
- 61 「文政六十三」一七八八年
- 62 「文政六十四」一七八九年
- 63 「文政六十五」一七八〇年
- 64 「文政六十六」一七八一年
- 65 「文政六十七」一七八二年
- 66 「文政六十八」一七八三年
- 67 「文政六十九」一七八四年
- 68 「文政七十」一七八五年
- 69 「文政七十一」一七八六年
- 70 「文政七十二」一七八七年
- 71 「文政七十三」一七八八年
- 72 「文政七十四」一七八九年
- 73 「文政七十五」一七八〇年
- 74 「文政七十六」一七八一年
- 75 「文政七十七」一七八二年
- 76 「文政七十八」一七八三年
- 77 「文政七十九」一七八四年
- 78 「文政八十」一七八五年
- 79 「文政八十一」一七八六年
- 80 「文政八十二」一七八七年
- 81 「文政八十三」一七八八年
- 82 「文政八十四」一七八九年
- 83 「文政八十五」一七八〇年
- 84 「文政八十六」一七八一年
- 85 「文政八十七」一七八二年
- 86 「文政八十八」一七八三年
- 87 「文政八十九」一七八四年
- 88 「文政九十」一七八五年
- 89 「文政九十一」一七八六年
- 90 「文政九十二」一七八七年
- 91 「文政九十三」一七八八年
- 92 「文政九十四」一七八九年
- 93 「文政九十五」一七八〇年
- 94 「文政九十六」一七八一年
- 95 「文政九十七」一七八二年
- 96 「文政九十八」一七八三年
- 97 「文政九十九」一七八四年
- 100 「文政一百」一七八五年

⑧「おぼあさん」
 ⑨「あたる古い言葉」
 ⑩「美」
 ⑪「何度も繰り返して言う風情」

◆ 小説 3

単元の振り返りシート

____年 ____組 名前 ____

学習目標

- ・ 作品に描かれたものの見方を捉え、人間や社会について考えを深める
- ・ 作品の成立した背景をふまえ、内容の解釈を深める

①学習した教材

②学習目標をふまえて、単元での学習を通してわかったこと、できるようになったことを書き出そう。

③単元で学習したことを、これからどのような場で生かせるか考え、自分の言葉でまとめよう。

広がる言葉の世界
翻訳古池や蛙^{かはう}飛び込む水の音——松尾芭蕉^{まつお ばしう}Old pond
frogs jumped in
sound of water.

——ラフカディオ・ハーン 訳

The old mere!
A frog jumping in,
The sound of water.——正岡子規^{まさおか しき} 訳

学びを広げる 作品を読み直す

ワークシート記入例

理由の分析	再読した後の「印象の違い」 や改めて「気づいたこと」	「印象」	選んだ作品 記憶している「内容」や 「印象」
美術の授業で、写真の発明によって物事を単に忠実に描く技術の価値が下がり、その後キジズムなどのさまざまな表現が現れたことを学んだ。テレビやインターネットで簡単に火事の様子を見られる現代と異なるからこそ、忠実に描かれた良秀の火災の絵は高く評価されたのだと思う。	当時、火事の様子を目にすることが多くなかったからこそ、写実的に描かれた火災の姿を後の人も称賛したのでかもしれない。	良秀が妻や子供の命よりも絵を書くことを優先していた様子。授業でもその姿勢についてみんなと意見交換した。	「絵仙師良秀(宇治拾遺物語)」(24ページ)

 評論・随想

単元の振り返りシート

____年 ____組 名前 ____

第四单元

- 日本語の表記法に対する筆者の見解を理解する
- 異文化との交流を通して培われた筆者の考えを理解する
- 文学と人間の関係を論じる筆者の意識を捉える
- 作品を読み直して気づいたことを論述し、言語文化について考えを深める

①学習した教材

②学習目標をふまえて、単元での学習を通してわかったこと、できるようになったことを書き出そう。

③単元で学習したことを、これからどのような場で生かせるか考え、自分の言葉でまとめよう。

 [目次](#) [＜ブックガイド＞](#) [▶ブックガイド](#)

▶ブックガイドリスト

▶読書記録シート

 [目次](#) [＜ブックガイド＞](#) [▶ブックガイドリスト](#)

ブックガイドドリフト

[illegible]

 読書記録シート 		No. _____
_____ 年 _____ 組 名前 _____		
書名		
著作者		
出版社・発行日		
読み始めた日	年 月 日	読み終えた日 年 月 日
読もうと思った いきさつ		
あら筋・内容		
読後の感想		

目次 <ブックガイド> ▶読書感想文の書き方

読書感想文の書き方

同じ本を読んでも、読み手によって感想はさまざま。読書感想文は読み手のものの見方、考え方を映し出す。読書感想文の本を書き終えたら、本の題名、あらすじ、目次、冒頭、友達からの推薦などを参考に、「この本を読みたい」と感じたものを選びよう。

①本を読み、次のような点についてメモする

- ・読み終わって、どんな気持ちになったか、それはなぜか。
- ・疑問に思ったこと。
- ・心に残った言葉や場面とその理由。
- ・作品の中で起こったことと自分が体験したこと。
- ・印象的な登場人物とその特徴。
- ・登場人物が自分と似ているところ、異なるところ。
- ・本を読んで自分の考えがどのように変わったか。

②内容を検討する

メモを見直し、どの部分を感想文に書くか検討する。

カムパネルラの行動と抱えている体験を書こうかな。



③構成を考える

自分の考えや感想がよく伝わるように、感想文の構成を考える。

④感想文を書く

下の例を参考に、書き方を工夫する。

⑤推敲する

- ・誤字や脱字、言葉の誤用はないか。
- ・主題と述語が対応しているか。
- ・一文が長くてわかりにくいがないか。
- ・くだけた表現や略語、語を用いていないか。

みんなの幸いを探しに行く勇気

一年三組 田中広実

「僕もあんな大きな暗の中だつてこわくない。きつとみんなのほんとうのさいわいをさがしに行く。どこまでもどこまでも僕たち一緒に進んで行こう。」

「銀河鉄道」の中で、いば心に残った言葉だ。この言葉に、ジョバンニの決心を感じた。そして、ジョバンニがこう考えたのは、カムパネルラがそばにいたからだと思った。

ジョバンニは親友のカムパネルラとともに銀河鉄道に乗って旅をする。列車にはさまざまな人が乗ってきて、そして降りてゆく。「銀河鉄道の夜」はジョバンニが出会いと別れを繰り返して、「ほんとうのさいわい」について考える物語だ。けれど、「ほんとうのさいわい」とはなんだらう。

（中略）

「ほんとうのさいわい」について考える間に、私の頭に浮かんだ

のは、遠足で行った登山のできごとだった。急な下り坂で滑りそうになったとき、そばにいた友達がとっさに私の手をつかってくれた。しかし、二人ともはでに尻もちをついた。

「ごめんね。」

と私が言うよりも先に、友達は、

「けがしなかった？」

と真つ先に私の心配をした。とっさに私の手をつかみ、心配してくる友達が最後のカムパネルラに重なった。

実は、カムパネルラは既に「みんなのほんとうのさいわい」のために行動していた。結末でカムパネルラは、ザネリを助けるために川に飛び込んだことがわかる。カムパネルラも「みんなのほんとうのさいわい」を実行して銀河鉄道に乗り込んでいたのだ。ジョバンニは、「みんなのほんとうのさいわい」を探すために、カムパネルラと一緒にどこまでも行きたいと言っていたが、その思いはかなわない。このときのジョバンニのことを思うと心が苦しくなった。

けれど、ジョバンニは銀河鉄道の旅を通して、一人でもみんなの幸いを探しに行く勇気をもつことができたのではないだろうか。そして、カムパネルラの行動を誇りに感じていると思う。私も本を読みながら、「みんなのほんとうのさいわい」について考える旅をした。そして、ジョバンニが決意したように、私もみんなの幸いを探

す人になりたいと思った。

題名
読んでみたくなる題名を考える。

書きたし
興味を引くために、感想文の中心となる話題で始める。

印象に残った言葉を引用する。
・読んでどんな気持ちになったか、それはなぜかを書く。

あらすじ
誰がどうなった話か、どんなことが中心の話かなどを簡単にまとめ、感想や疑問点を述べる。

自分の共通点
登場人物と似た体験や、同じような気持ちを感じたできごとについて考える。

まとめ
本を読み、どんな思いをもったか、自分の考えがどう変わったかを書く。